



針葉樹會報

通卷第六十五號

藏王詣

増山清太郎

諸君！御案内の通り汽車の食堂には、午前五時から午前一時まで營業する旨が掲示してある。然るに何ぞや、昭和十二年四月三日午前五時四十三分、奥羽線のノロ急が米澤に止ると同時に食堂に飛込んで、性急に餌の注文に及んだ孫さんは「まだ時間にもならないのに！」と食堂ガールに叱られてしまったのである。でも大分待つて餌にはありついたが、ついで上ノ山驛頭へスキーは駄目だあ、ズドウシヤがイタマスイで……。」之が運チャンの御託宣だ。自動車が惜しいからスキー客は斷る、さいふ。イヤハヤ、のろい汽車だが八時間許りも夷狄の國に向て走るさ、かうも物の道理が逆様になるものと、一同啞然たり。

コンチャン怒つたのなんのつて、もう一生涯斷じて上ノ山には來ない、といふのだ。だがこの前來た時は、勿論スキー附だつたが、鞠躬如として車に迎入れたのだから、今度はコンチャンがあるんで斷られたんだ。コンチャンと自動車の惡因縁は、上高地で噴慨した顔をエノケン氏のシネに收められて以來、既に有名なものののだ。

さて、そんな車に誰が乗つてやるもんか。半郷までバス。それから荷擔ぎのオランダに一切あすけて、ブラ／＼歩く。山ノ神からは雪道である。遙か彼方には懺悔坂が切立つたやうに見えるし、その先の地藏岳が白くブツ／＼してゐるのは、まだ名物樹氷の生きてゐる證據だ。

この行には筆者の義兄と友人が、特に願出て同行を許されてゐたのだが、義兄が山形館の息子を知つてゐるさいふので、それに泊る。處がその息子たる、金子鷹之助教授にそつくりなので、早速金子さんと呼ぶ事にする。例に依て一風呂浴びて、瀧山に行かうかと思つたが、金子さんが、詰らない所ですよ、さいふので藏王小屋に行くこゝなる。五色温泉の裏のやうな所を登つて鳥兜山の肩、即ち

見晴峠まで行くさ、もう枯木に面白い樹氷がまつはつてゐる。天氣はあまり良くないが、でも鳥海山、月山、東北朝日などが見える程度だ。それからデコボコの斜面を上つたり下つたりして曾遊のコボルトヒュツテを叩いたが誰もゐない。西の方へ少し下つて蔵王小屋に落付き近所で滑る。小屋は今シーズン始めて開いた真新しいもので、數十人泊れる。此處に泊れば、随分面白く遊べると思ふ。この邊に不安苦撮影場といふ新名所が出来た。雪質はよい。

この日宿に歸ると、年頃の娘が室に現れて、「しゅがもつえるふさえがつせ？」と言ふ。湯が餅（温泉で練つた餅）を欲する人はゐないか、といふのである。試食するさ案外旨いので、土産に二十錢注文すると、しきりに何か辯じ立てるが、「二十錢ばつこ」「三十錢ばつこ」以外には何も聞取れない。「箱入りもあるのかい」なんて、あしらつてゐる中に歸つて行つたが、後で考へてみたら、パツコは「許り」で、二十錢、三十錢なんてケチな事を言はずにもつと餘計買へつて事らしかつた。

翌早朝、火を運んで來た番頭に「天氣は？」と聞けば、「われえ」さ答へる。濫々起出してみると、青空だ。七時半、今日は異分子を交へないで宿を出る。昨日の道を登つて行くほどに、成程天氣は西の方から崩出して、太陽は雲間をほんの僅か漏れた許り、午後には一荒れ來さうだ。ゆつくりしてはゐられないさ、蔵王小屋を脇目に睨んだまゝ、懺悔坂にさつつき、樹氷の間を縫つて三寶荒神と地藏の鞍部に出ると、もう尾根筋の雪はコチ／＼だ。雪の軟かさうな所を撰んで、地藏の東側を大廻りして鷲小屋の跡に出てあさは真直に熊野岳の頂を目指して岩さ偃松の點綴する中を登

る。頂上に着いたのは十一時だつたが、着くと同時に西の方仙人澤から猛然と霧が襲ひ掛つて、視界を閉してしまつた。西北風が吹いて、寒い。だか後から登つて來たローカル氏は「こんな和かな日は少い。」と獨りごちてゐた。例のお社は雪穴の中で、樹氷に包まれて鎮座する。此處で四人寄りそつてパンを嚙つてゐる所をカメラに収めたつもりだつたが、宿に歸つてから、シャッターの落ちなかつた事を發見して大笑ひになつた。

さて、いよいよ降りさなると、今年も之で滑り納めと思ふさ、流石に後髪を引かる、思。熊野岳ではカチ／＼のグラストの中、岩角や偃松を縫つて、久振りに山スキーらしきものを味はひ、地藏岳では新雪を求めてボーゲンを楽しみ、三寶荒神では出来るだけ斜面を緩くさつて、樹氷の林を徨ひ、懺悔坂は直滑降で飛ばす。その間、お茶を飲んだり、お菓子をはうばつたり。それでも二時すぎには宿に着いて、また昨夜の餅賣娘と一問答あつて、再びスキーで山の神まで。それから擔いだ。

この邊まで來ると視界は開けて、向側の白鷹山から狐越あたり彌陀ヶ原を思はせる山容が、青黒く夕の空に靜り返つて、班々たる雪を載せてゐるのは、なか／＼に捨て難い趣がある。

「一生涯斷じて……。」と頑張るコンチャンも、一汗の後の、心持ち熱つめの、清冽な温泉の魅惑には勝てず、山形説を捨て、またもや上ノ山に出て、あまり上品でない宿屋で一盞を傾ける。町の中で「村尾旅館」の看板に目を留めて來たペンチャンが「俺は村尾の婿だ」つて女中をからかつたのは、のんきな山旅にふさはしいエピソードだ。

昨日はこの邊までも白いものが舞つてゐたのに、今夜はほてつた顔をそば降る春雨に打たせて、驛へ急ぐ。汽車は案の定がら空きだつたが、その暑かつたこと。一晚中サイダーを飲んだり、「木に生るナス」を嚙つたりしてゐた。

一行は中川、村尾、近藤、小生。北の方へ出て來た甲斐あつて四月のスキーとしては随分面白かつた。

三峠に登り河口に降る

K

峯を深みわが登り行く岩石の嶮々しき岩に霧立ちのぼる

富士よりもわが懐しき秩父嶺は黒木くろぐる山なみなせり

見遙るかす八ヶ岳の裾野の原をひろみ大空かけて飛ぶ鳥かげもなし

はや十年思ひは遠し甲斐ヶ峯のはだらの雪にわが瞳ぬる

おゝどこになだるゝ草の尾根道ゆ見ゆる富士ごさに君喜びぬ

谷渡り驚鳴きてこの溪の青葉しげゝく湖に續けり

郭公もなきぬひぐらしも又鳴きぬ向脊の山の森かげにして

今日の日を富士と語りつ満ち足りし心もかろく湖渡り行く

見かへればはや石割の頂に夕陽かげろひ山霞せり

初夏へ

いつしかに蛙の聲の窓べにも鳴きつぐ宵さなりにけるかも

砂利を踏む靴音去りて鳴きやみし蛙の聲の又聞へ來ぬ

むかつ森煙ろふ今朝の深霧に傘さし行ける人もありけり

水ぬるむ濠邊の草に坐り居て藻かげの目高小走るを見つ

初夏の光漂ふ池の面に柳は揺れて水ぬるみ行く

傘もさゝすひたぶる雨のかゝるまゝに獨り歩めば心和みぬ

今朝の雨拂ひて照れる天つ日の光くまなく波にかゞよふ

今日見ればはや花散りて葉躑躅のかい間に光る池の小波

薄紅の花のまろみに朝の露置きて清しき芍薬の花

露雨のしきどにかゝる芍薬の花重ければうなだれしかな

縁先に置かれし吾子のゴム靴も梅雨に入りては紅襪せにけり

満潮に水は動かす堀川の面に揺るゝ灯影佗びしも

甲斐駒摩利支天南稜登攀記

大塚 武

二十四日豪雨の一日を大武川畔大藪鑛泉に送つて今朝はすがすがしい五月晴富士山の疲れも愈えて重い荷を背に六時四十五分鑛泉を出る。左岸から右岸へ一ノ澤二ノ澤も過ぎて雨で崩れた道を二時間後には赤薙橋に來た。時々谷の奥に摩利支天の岩峯が豪快な線をスカイラインに描いて私達の胸を躍らせる。やがて九時過ぎ右岸から左岸へ第一回の渡渉が始る。雨と融雪に増水した大武川の渡渉は實際辛かつた。對岸にわたつて日にあたりながら物も云へずに天を仰ぐ。そして又歩き出す。ヒョングリ瀧まではそれでも意外に早く出る。この分では南稜直下サデの岩小舎に二時頃には着くのではなからうかと思はれたが、それから渡渉が續き三回目には架橋したりして一時間もかゝつて地獄谷の出合へ着いたのが、三時半、本をよく讀んでおかなかつた罰でこゝでも半時間も道を探し漸く五時半岩小舎に落ち着いた。然し實は之が目指すサデの岩小舎とも氣がつかず迫り來る夕暮と疲労で泊つてしまつたのであつた。翌二十六日三時起床オートミールで朝食五時出發

暫らく仙水峠道に沿ひ河原へ下る所で右へ入る。尾根らしき所をぐんぐん登ると仙水峠と同高位になり四邊の眺も開け南稜三本の稜の中央稜にある事がわかつた。そのまゝ登りつゞける。登るに従ひこの稜の上部が六〇度位の傾斜で、一〇〇米もの間にいくつと数へられる程の大岩磐での上つてゐるのが見えて來た。「之は難しいかな」と次第におされ氣味になる。然し左の稜へ移るにはまだその間の谷が深すぎて捲けさうもない。も少しこの稜を登つて摩利支天南面特有の右上りに木の生えた帯（之を鳥さ稱す）を利用して左の稜へ移らうとする。やがて見當をつけて左に捲き始める。（七、一五）瀧の上をトラバースして島にさりつき簡単に左の稜へ出る。（七、四〇）傾斜が急でよく休まれない。左右とも落ちこんで稜はやせてゐる。然し木の根を握つて懸垂上りに登る。木が切れて岩になる。大きな花崗岩の岩でホールドはない。アンザイレンしてHの肩に乗り摩擦ですり上る。上を見ると又悪い。チムニー狀の所であるが、下がつばまつて身體を入れると身動きが出来ない。仕方なく又Hの肩に乗りチムニーの上部へもぐりこみどうやら登る。この二箇所トツプはどうやら行くが次は全然ホールドの無い所をザイルだけで登らねばならないので相當苦しい。それから依然急な落ち込む様な斜面を木の根をたよりに登る。次第に腕が疲れて指がつゝて苦しい。最後のオーバーハング狀の所を木をたよりに登ると稜は急によくなつた。そして上の島（摩利支天頂上直下まで上つてゐる帯）へ容易にさりつけさうに思へる。高度約二六〇〇米（二〇、三〇）一寸食つて直ぐ登る。木はなく足下から崩れる花崗岩の靡爛砂の斜面を登つて頂上直下の岩

場に來る。右は地獄谷側となり島はこゝで切れてゐる。今まで見えなかつた白峯北岳が朝興峯の上に顔を見せる。割合に快適な岩を登つて匍ひ松をこぐと劍や像の立つ摩利支天絶頂に來た。（一、二〇）「ヤッホー」を呼べば答が風に乘つて來る。見れば駒の頂近くカンチャン・船本氏の姿が見える。セッセと登つて駒の頂で四人無事と成功を喜び合ふ。やがて崩れ出した天候の中を駒津岳へ下つて行く。變な岩場も今は心安く極くゆつくりと話に花を咲かせて下る。仙水峠へ着くと今にも降りさうな氣配がするので急いで大武川の谷に入る。岩小舎着四時三十分。雨になつたが薪はよく燃える。天井の岩面を匍ふ水滴がポツリポツリ落ちて飯盒やカツプを總動員して防ぐ。然し雨でも明日は北澤へ行くのだ。風風を正面に見サデの大岩壁を背後に負ふこの岩小舎に過した二日間の生活の思ひ出に薪はどんぐりべられ、二人の顔も四邊も赤々と輝いて「登つてしまつた」と云ふ満足感が身中にみなぎつて來る。かくて感激の夜は更けて行つた。

（附記）南稜は以上意外の短時間と容易さで登れてしまつた。木登りの所多く登れない所は全然手もつけられない。ヴァライエタイに乏しく岩も腐蝕してホールドなくフリクシヨン一天張りで結局量的ではあるが、全體として岩登りの對象としてよくない。尙菲崎日野春あたりから見える線は中央稜であつて、私達の登つた左の稜よりはるかに困難である。中央稜より右の稜地獄谷へ行くに従ひ傾斜は急で岩は大きく、尤も岩の質は良くなつてゐる様であるが困難さは兎も角一層増す事と思ふ。

マンメリイ登攀年譜

Albert Frederick Mummery (1855—1895)

今春學窓を去られた四人の友より山岳部へマンメリイの “My climbs in the Alps and Caucasus” が記念として寄贈されました。マンメリイに就いては故大島氏を始め數多の人々が既に多くを書いてゐますから今更喋々する必要もないと思ひますが、右の書を繙く上に便利な様に、彼の登山年譜を簡単に述べやうと思ひます。之はママの “Alpine Club Register” に依つたものです。

(望月達夫)

一八五五年九月十日 英國ドーヴァに生る。

一八八三年 W・J・ベタリツクの妹マリイと結婚す。

彼は其の兄弟と共にドーヴァ及カンタベリイに於て製革業を営み居れり。

一八八八年十二月 アルバイン・クラブ入會。

又王立地學協會の會員たり。

一八八九年 J・A・ホブソンと共著にて “The Physiology of Industry” なる一書を世に贈れり。

一八九五年八月廿四日? パンヂヤブ・ヒマラヤの雄峯ナング・パルパットにて生命を斷つ。時に年齢四十歳なり。

◎アルプス、コウカサス、ヒマラヤに於る彼が足跡は左の如し。

一八七一年 初めて瑞西を訪れ、セオデユール峠を越ゆ。

一八七三年? アルフユベルヨツホ、モンテ・ローザに登る。

一八七四年 マッターホーン登にる。(彼が七回のマッターホーン

登山の第一回目なり。)

一八七五年八月八日? トリフトヨツホ、マッターホーンへ登る。

一八七六年七月六日 モン・ブラン氷河よりモン・ブラン登攀。

一八七九年八月廿七日 テイフエンマツテンヨツホ及びミシヤベ
ルヨツホ登攀。

八月廿八日 ラキンヨツホ登攀。

八月廿九日 フレツチャホーン横斷(ラキン氷河よりの新登攀。)

八月卅日 ソニングホーンの初登頂。

八月卅一日 リイド峠へ登る。

九月三日 マッターホーンのツムツト稜初登攀。

九月七日 W・ペノールと共にデユールンホーン登攀(之は記録
にのこりしものゝ中の最初)

一八八〇年六月 コル・ツールナンシユ。

七月六日 コル・デユ・リオンの初通過。

七月七日 グールメイユウルへ。

七月十二日 コル・デユ・ジャン。

七月十三—十四日 グラン・ミユレ往復。

七月十五日 エイギユ・デ・グラン・シヤルモの初登攀。

七月十六日 スタルデン。

七月十七—十八日 マッターホーンへ向け出發し引返へす。

七月十九日 マッターホーンのフルツケン稜を初登攀し頂上直下
より東面をトラヴァースせし後普通のルートによりて登頂す。

七月廿日 シヤモニーへ。

八月?日 ダン・デユ・ジャンを登らんとし頂上直下に至る。(一

八八二年 A・セラがジャンに初登頂せし時マンメリイの積みたるケルン及び彼が "Absolutely inaccessible by fair means" と記したるカードを發見せり云ふ。

一八八一年七月廿八日? コル・デュ・ジャン。

七月卅日 チャルプア氷河よりエイギュ・ヴェルトの初登攀。

八月一日 メエル・ド・グラスよりエイギュ・ド・グレポンを試登す。

八月三日 グレボン北峯の初登攀。

八月五日 エイギュ・ド・グレポンの初登攀。

一八八三年 結婚す。

一八八七年 夫人を伴ひてマッターホーン登山(五度目)。

七月十五日 タツシユホーンの南西稜(トイフェルグラート)の初登攀。

一八八八年 コウカサスへ。

七月七日 ヒアチゴルスクーナルトチクよりベザンジへ。

七月八日 ミセス・コシユ

七月九日 デイクタウの偵察的試登。

七月十日 單獨にてデイクタウの南西バットレスを約四千米迄登る。(デイクタウの高度は五一九七米)

七月十二日 チエルク谷の源頭たるデイクシユ峠の初通過

七月十三日 デイクシユ氷河よりシユカラ(五一九三米)の試登。

七月十四日 ヴァリエーシヨナルトによりてデイクシユ峠を越へコシユへ至る。

七月十七日 ヴァリエーシヨナルトによりてザンネル峠を越へ

ムジャルへ。

七月十九日 ツウイバアよりレクスウル峠を越へバシイル氷河よりチコゲム谷へ歸還す。

七月二十日 チエゲムへ。

七月廿一日 ベザンジへ。

七月廿四日 デイクタウの初登頂。

一八八九年八月十七日 シユレツクヨツホの初通過。(ガイドレス)

一八九〇年 再びコウカサスへ。

八月十七日 W・J・ベタリツクと共にフュトナルヂン峠の初通過(カラウルよりゼシユコ谷へ)。

一八九一年八月十二日 E・カアと共にツウル・デュ・グラサシビエルの登攀をなし、その登路降路に於て部分的に新ルートを探れり。(ガイドレス)

一八九二年七月十一日 E・カア、W・J・スリングスビー、G・

A・ソウリイ等と共にエイギュ・デュ・プランの偵察をなす。

七月十三―十四日 カア及びスリングスビーと共に北西よりプランを試登す。

八月十八日 コリイ、バスツウル、G・ヘイスチングス等と共にエイギュ・ド・グレポンの第五登攀。(ガイドレスにては二番目初横斷。)

八月廿三日 E・カア、J・N・コリー、ベタリツク、C・H・バスツウル、ミス・バスツウル、ミス・ブリストウ等と共にエイギュ・デ・シャルモの横斷をなす。(ガイドレス)

又此の年グラランド・ジョラスの東稜に試登をなす。

一八九三年七月廿五日 コリー、ヘイスティンクス、スリンクス
ビイと共にダン・デュ・レカンの初登攀をなす。(ガイドレス)
此の頃又コル・ド・トリオレに登り、その近くに在る無名の
一小峯に初登攀をなす。

八月五日 ミス・ブリストウと共に再度グレボンの横断をなす。
八月七日 エイギユ・デュ・プランの西面よりの初登攀にして而
も初めての横断をなす。

プティ・ドリユウにも登る。

八月廿四日 コリー、ヘイスティンクス、ミス・ブリストウ等と
共にブルイユよりマツターホーンに登り、暴風雨中同ルート
を降下す。(ガイドレス)

一八九四年八月二日 コリー、ヘイスティンクスと共にコル・デ
クウルトの初通過をなす。(ガイドレス)

八月十一日 モアンヌ尾根よりエイギユ・ヴェルトを登攀。

八月廿七日 コリー、アブリツヂ公と共に、マツターホーンのツ
ムット稜の第三登攀をなす。

一八九五年 ヒマラヤへ。

パンヂヤア・ヒマラヤの巨峯ナンガ・バルバットへ遠征をなす。
パーティはコリー、ヘイスティンクスを加へた僅か三人にてガ
イドは伴はず。六月廿日英國發。七月五日ボンベイ着、七月九
日カシミール。七月十四日トラグバアル、カムリの二峠を越ゆ。
七月十六日タツシン氷河に近く幕營。七月廿日マゼノ峠を越ゆ。
七月廿二日ディアミライ谷着。七月廿三・廿四日ディアミライ
峠(五、五〇〇米)の初通過をなし、マゼノ峠を再び越ゆ。七月

廿八日コリー、C・G・ブルウスと共にタツシン氷河を探りそ
の源頭の尾根上約四、八〇〇米の地點に達す。七月卅一日コリ
ー、ブルウス、ヘイスティンクスと共にディアミライ谷へ直接
達し得る乗越を發見せんとして、六千米以上の高度に達し、約
五八〇〇米の地點にビヴアークす。八月一日マゼノ峠を再度越
ゆ。八月六日ナンガ・バルバットの西面を約六千米の高度迄登
る。八月十一日コリーと共にディアミライ峯(約六、三五〇米)
の初登攀をなし、ゴウマン・シン峠を横切る。八月十五日數日
間の食糧を携行しナンガの西面登攀に發足せしも、コリー及び
グルカが病みたれば登攀を一時中止して廿日に戻る。此の方面
よりの征頂を斷念し北方ラキオト谷より登攀せんとし八月廿三
日二人のグルカ(ラゴビール、ゴウマン・シン)と共に、ディ
アマ氷河とラキオト谷の源頭とを結ぶディアマ峠を越し、ラキ
オト谷へ下る豫定にて出發す。而してそのまゝ永久に消息を斷
つ。

彼の英國に於ける記録にのこれる唯一の登攀は一八九三年、
ウエストウオター・セクレのグレイト・ギャリーの第二登攀で
ある。

—了—

山岳部報告(五月)

記録

(1) 劍岳(五・二〇一・二七) 森川

八ツ峯を登つた。雪は比較的少なかつたが、ゾンメルは快適。

一人で五月の立山を満喫して来た。

(2) 富士山(五・二二—二三) 小林、鷲崎、原、大塚、日江井、里見、高橋、宮城、水田、(以下新入部員) 木島利夫、山田亮三、小泉三郎

この行は豫科生が主になつてやつた登山で意義深きものなり。

(3) 甲斐駒ヶ岳摩利支天南稜(五・廿四—廿九) 大塚、日江井

大武川より入り、サデの岩小舎を根據にして廿六日の日に南稜を登攀した。尙ほ廿八日には朝興岳往復。

(4) 甲斐駒ヶ岳、仙丈岳(五・廿五—廿九) 望月、船本文治(新入部員、本一)

仙丈岳には未だ多くの残雪があつた。歸りは大塚、日江井等と伊那へ降つた。

(5) 甲斐駒ヶ岳(五・廿九—卅) 小泉、山田

日誌

○定期部員集會 五月三日(月) 於本科部室

出席者(本科六名、豫科三名)

○定期部員集會 五月八日(土) 於本科部室

出席者(本科四名、豫科五名)

○定期部員集會 五月十四日(金) 於本科部室

出席者(本科九名)

記念祭が迫つてゐるので、豫科生は來られなかつた。尙ほ今年は豫科でも毎週水曜に集會を行つてゐる。

○定期部員集會 五月廿一日(金) 於本科部室
出席者(本科六名、豫科六名)

○定期部員集會 五月廿六日(水) 於豫科部室

出席者(本科一名、豫科八名)

○定期部員集會 五月廿八日(金) 於本科部室

出席者(本科三名、豫科一名)

記録

○陣場山から五日市へ(五月九日) 中川

市道山(七九五米)から盆堀川の支流チガ澤へ降りる處を間違つて南秋川へ降りてしまつた。此邊地形が複雑なところ、見透が利かないのでこんなザマになつてしまつた。

○入笠山(五月廿三日) 中川

去年の秋、山口君の獨身離別記念に守屋山へ行つたといふ話を高瀬君から聞いて、僕も行こうか「高遠」を擴げて見ていると「入笠山」といふ一寸面白さうな處があるので文献を調べてみると皆ほめて居る。五月になつたらと待つてゐた。すると、俄然鐵道省の「ハイキング・コース」へ出た。荒されぬうちにさ急いでかけつけた。赤城をもう一屬女性的にしたやうな處。スキーはすばらしく面白いに違ひない。冬が待たれる。

○三ツ峠(五月卅一—六月一日) 吉澤一郎

消息

松木謙三君 四月五日次女誕生のお喜びあり。茂子と命名す。黒田正治君(舊姓齋藤) 四月廿八日華燭の典を擧げらる。夫人は通子様、新居は兵庫縣武庫郡精道村打出字郷ノ木十六番地。編輯後記 都合により會務の報告は次號に譲りました。